

内申書は凶器にも

短大から私たちの施設によく実習依頼があり、実習生の評価も求められる。記入は部門担当に一任しているが、某日、某学生（女性）のをふと見ると、「消極的、全くやる気がない」と感情的、最悪の評価。厳しく訂正を命じた。「よい点だけを探して、うんとほめよ。人の子を傷つけてはならない」。評価する者は逆に自分が評価されていることでもあることを忘れがちである。

内申書には私にも暗い思い出が付きまとうている。大学卒業の時、配属将校が、不思議そうに「中学（旧制）の時、将校たちと何かあったのか。内申に悪くかかれています」と問われた。まだ幼い中学生、悪いことをするはずがない。そういえば、高校時代、将校の私を見る目が変わった。差別めいたものを私は課せられていた。今にしてすべてが解けた。その内申書のせいだったのだ。内申書とは悪い教師にかかると凶器と化して、ひとの一生をめちゃめちゃにする。

老人ホームでもお年寄りの「生活記録」「処遇記録」記入が最重視されている。そ

の存在を知れば、ここを最後の安住の地とされているお年寄りには屈辱にたえないであろう。だから私たちは記入に気を配る。—ご本人のためになること、名誉になることを簡潔に。本人に公示できる内容であること。

老い人に何のための記録か。普通の家庭生活にそんなものはない。私たちのホームもまた普通の暮らしを目指すものでなければならぬ。

(一九九二年十一月十四日)